

## 【支部特集/支部だより】

## 支部だより：東北支部「被災地小学校における SDGs 教育」

— 廃プラスチックをテーマに —

東日本大震災が発生してから10年経ったが、甚大な被害を受けた被災地の復興にはこれからも大分時間がかかりそうである。特に津波被害があった沿岸部の市町村は、新しい職を求めて他地域へ移住した人、集団移住で今まで住んでいた街を離れた人、被災地の復興を見届けながら住み続けている人等、それぞれが日常生活を取り戻している。

東北大学大学院国際文化研究科 国際環境資源政策論講座(劉研究室)では、震災直後から被災地の小学校を対象に、復興教育の出前事業を行ってきた。特に小学校4年生の社会科に出てくる「ごみの処理と利用」という単元を中心に、廃棄物の適正処理とリサイクルに関する体験学習に力を入れてきた。2年前からは、世界的なプラスチック原料メーカーのダウ・ケミカル日本(株)と大手リサイクル業者の(株)青南商事、SDGs 未来都市の東松島市と連携し、廃プラスチックをテーマにSDGs教育を実施している。動脈産業と静脈産業、大学、被災自治体の産学官連携による小学校の出前授業は全国的にも珍しい取り組みであると考えている。

2020年は、コロナ禍の影響で、被災地の小学校に向いて出前授業を実施することは難しいと考えていたが、東松島市の「地方創生・SDGs推進室」と市内の小学校のご協力で、当初予定していた3校でSDGs教育を実施した(赤井小学校、矢本西小学校、大塩小学校の4年生、計104人参加、図1,2)。

最近、使い捨てプラスチック容器の増加、プラスチ

クによる海洋汚染、中国による廃プラスチック輸入禁止等、国内外において廃プラスチックの問題が注目されるようになった。すでにレジ袋の有料化が定着しており、今後、使い捨てスプーンやフォークも有料化が検討されるなど、廃プラスチック問題は持続可能なまちづくりを実現するためのSDGs教育のテーマとしても有効である。2020年の授業では、われわれの日常生活でプラスチック製品がどれだけ多いのか、さまざまな用途や機能をもっている最新のプラスチック原料と製品の紹介、プラスチック容器包装の選別とリサイクル方法、再生プラスチックの用途、SDGsとプラスチック問題の関係等、幅広い内容の授業を実施した。そして、多様なプラスチック容器と製品、廃プラスチック、廃プラスチックの選別技術、再生プラスチックで製造された商品等を展示した。子供達が展示物を直接触れることはできなかったが、出前授業に参加した各社の社員、大学教員、自治体の職員との交流を深めることができた。

今回は、コロナ禍の影響で、限定的な体験学習だったが、参加した児童や教師の評価も高く、SDGs教育の様子は東北放送「Nスタみやぎ」にも紹介された。高齢化、少子化、転出等で人口減少が続いている被災自治体にとっては、「地域創生とSDGs」は重要な課題であり、廃プラスチックをテーマとするSDGs教育は有効であると考えている。

(東北支部 幹事長 劉 庭秀)



図1 劉 庭秀氏の授業



図2 東松島市 赤井小学校の児童と